

保育者養成教育におけるアウトリーチ活動の可能性

—音楽と福祉による連携教育—

岩佐 明子・渡邊 慶一

本研究は、保育者養成校で音楽と社会福祉をそれぞれ学んでいる2つのゼミナールが協働し実施したアウトリーチ活動について、学生にどのような気づきや学びが得られたかを基に、活動の教育効果を検討したものである。学生は、活動を実施する中で不特定の子どもや保護者との対話、予測できない環境への柔軟な対応の必要性に気づき、子ども・子育て支援としてのアウトリーチ活動の意義を学んだことが示唆された。

キーワード：アウトリーチ活動、保育者養成教育、音楽、社会福祉、連携教育

1. 研究の目的と背景

アウトリーチとは、社会福祉や精神保健の分野で地域支援のため伝統的に活用されてきた手法である。社会福祉分野では、1869年に英国のロンドンで設立された慈善組織協会（Charity Organization Society）の友愛訪問（Friendly Visitor）にその源流をみることができる。当時の産業革命を背景とした、貧困問題に対して行う救済活動を主たる目的としており、訪問を通じた調査により支援の必要性を科学的に解明するとともに、組織的な連絡・調整を図り、ソーシャルワークの基礎を築いた活動として知られる。この友愛訪問を社会福祉分野におけるアウトリーチ（Outreach）の原点として捉えることができる。

現代では、社会福祉分野におけるアウトリーチは、課題を抱えながらも、支援につなげられない人や支援を求めようとしない人々に対して、相談に訪れるのを待つだけではなく、生活課題が存在する地域社会や生活の場に直接出向き働きかけることにより、ニーズを把握したり、支援関係を構築したり、支援につなげることがで

きるよう手立てを講じたりするアプローチの形態を指している（福富（2011）、荒井（2019:46）、福富（2021）、松宮（2021）、三菱UFJリサーチ&コンサルティング（2021）、牧里（2023）、大塚・木戸・鶴岡（2023:14）、狭間（2023））。

2020年に改正された社会福祉法では、第106条の4において、市町村は地域の生活課題を解決するために資する包括的支援体制を整備するため重層的支援体制整備事業を行うことができるとされた。重層的支援体制整備事業は、①相談支援、②参加支援、③地域づくり支援の3つの支援によるアプローチから構成される。この事業では、本改正によって「アウトリーチ等を通じた継続的支援事業」（社会福祉法第106条の4第4項）が新たに位置づけられており、地域における生活課題が複雑化かつ複合化する中で多様な支援活動や地域づくり活動の中で、潜在的にニーズを抱える人を探す役割も期待されている（三菱UFJリサーチ&コンサルティング2021）。その中で、アウトリーチの効果的で現実的な活用が期待されているといえよう。アウトリーチには、課題を抱えた人々の発見、予防的

なアプローチ、そのために必要な気づきにつながる地域のネットワークづくりなどの意味が含まれている。

近年では、このアウトリーチの考え方やその手法が専門性を異にする分野において広がりをを見せている。そのひとつが音楽分野におけるアウトリーチ（以下、音楽アウトリーチという）である。

音楽アウトリーチ研究の第一人者である林（2013:6）は、「音楽分野でのアウトリーチとは、音楽家や音楽団体・機関が普段音楽に触れる機会の少ない人々に働きかけ、音楽を普及することである。そして、音楽の提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむ双方向的な活動というスタンスが特徴である」と解説している。永島（2021:97）は、2001年から2019年の期間に日本で発表された、音楽アウトリーチに関する研究を94篇抽出しているが、音楽アウトリーチ活動を実施・提供する主体として、「劇場／音楽堂（コンサートホール）」、「実演団体（オーケストラ・オペラなど）」、「音楽家（個人）」、「大学（教員、演奏家、音楽関係の専門職養成）」、「行政」、「企業メセナ」、「団体（アウトリーチ活動を行うNPO法人、財団法人など）」を、利用・受け入れ主体として、「学校」、「福祉施設・病院」を挙げている。このように、現在、音楽アウトリーチに関係する提供者及び対象者、実践の場及びその活動内容は多岐に渡っていることが確認できる。

これまで、大学生が参加した音楽アウトリーチに関する研究を確認すると、音楽大学や教員養成課程で音楽を専門に学ぶ学生が提供者になり活動を行い、その教育効果を検討したものがある。高橋（2013:50）は、学生による実践報告書及び見学レポートの記述を分析し、専門分野に関する深い知識や経験の必要性のみならず、コミュニケーション能力や立ち居振る舞いやマ

ナーなど、人間教育に繋がる学びに気づいた学生がいたことを報告している。また、新井・木下（2013:23）は、学生の活動後の感想から、自発的・能動的な体験ができたこと、コミュニケーション力のアップ、異なる学年の共同体験等を学んだことを報告している。また、原・山中・木村（2016:5）は、実践後の学生に行ったアンケート調査から、アウトリーチ活動が学生にとって演奏力だけではなく、聴き手に対するコミュニケーション力やコンサートの演出力、自らの実践を振り返る省察力を育成することができると指摘している。

これらから、学生は音楽アウトリーチを行うことにより、演奏力の向上だけではなく、演奏以外で聴き手に働きかける力や自らを振り返る機会を得たことが読み取れる。音楽アウトリーチは、対象者だけではなく、提供者である学生にも教育効果があることから、多くの教育機関で授業の一環として取り扱われている。

保育者養成校の音楽ゼミナールでも多く取り入れられている。学生は、音楽の専門家ではないが、音楽と保育の専門性を有する教員からの働きかけを活かしたプログラムを実施しており、対象者である子どもやその保護者、そして提供者である学生どちらも意義深い活動になっている様子がうかがえる。保育者養成校の音楽ゼミナールで未就学児を対象に実施した事例として、田邊（2024）と宮澤（2024）の研究がある。田邊（2024）は子育て支援の場で学生が主体的に計画、実施した事例を挙げ、学生を対象に行ったアンケートからその意義を明らかにしている。また、宮澤（2024）は、保育所で活動を行っており、学生と保育者にアンケート調査を行い、活動の教育的意義と課題を明確にしている。

このように、大学生が実施する音楽アウト

リーチの提供者は、音楽大学や教員養成課程で音楽を専門に学ぶ学生や、保育者養成校の音楽ゼミナールであることが確認できた。それぞれ各大学で学んでいる専門性を活かしながら活動を実施しているが、いずれも、音楽を専門とする教員が主導し、音楽を学んでいる学生により場が構成されるものであり、必然的に音楽が活動の中心を占めている。教員ではなく大学生が主体となり企画、実施し、音楽以外の分野とコラボレーションした実践を対象とした研究は見当たらず、その教育効果を検討することは意義があると考えられる。

音楽と社会福祉がそれぞれ取り扱う「アウトリーチ」が意味するところやその活用方法について、立場性の違いがあるものの、待つだけではなく、地域資源に自ら働きかけて対象者のニーズを把握したり、プログラムを実践したりするという点において、共通点を見出すことができる。学際的な性格を持つ保育者養成教育の立場から、異なる分野の教育が目的を共有し、協働して地域をフィールドとした実践を展開するところに、本研究の意義がある。

本研究は、保育者養成校において音楽を学んでいるゼミナール（以下、音楽ゼミナール）と社会福祉を学んでいるゼミナール（以下、社会福祉ゼミナール）が協働し実施したアウトリーチ活動について、学生にどのような気づき、学びが得られたかを基に、活動の教育効果を検討する。また、合わせて研究参加の同意を得られた来場者の保護者を対象に質問紙調査を行い、活動の満足度や改善点を探ることも目的とする。

2. 研究方法

筆者らは、それぞれ音楽教育と社会福祉を専門としており、A 短期大学で開講されている「保

育基礎ゼミナール」（2年次前期開講科目）、「保育専門ゼミナール」（2年次後期開講科目）において、それぞれの専門に沿って学生を指導している。

両ゼミナール活動の集大成として、2023年12月9日（土）に各ゼミナールで学んだ知識や技術を活かすことを目的に、地域の住民（未就学児とその保護者）を対象に、B 児童館でアウトリーチプログラムを実施した。

2-1. B 児童館で実施したアウトリーチ活動

(1) B 児童館の概要

児童館は、18歳未満のすべての子どもを対象としており、児童福祉法第7条第1項に規定される児童福祉施設のうち児童厚生施設に位置づけられている。同法第40条には、「児童遊園、児童館等児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操をゆたかにすることを目的とする」と規定されている。遊びを通して子どもへの支援を行う児童館と、保育者養成校の教員と学生が提供する遊びのプログラムについては、これまで渡邊らが報告している（渡邊・山成・福井2011、福井・山成2012、渡邊2012）。

児童館の運営については、2018年に改正された児童館ガイドライン（以下、ガイドラインという）に依拠している（厚生労働省2018）。この改正において、児童福祉施設としてその施設特性を新たに、①拠点性、②多機能性、③地域性の3点に整理がなされ、地域の拠点として子どもの居場所になることや子どもが直面している福祉的な課題に対応すること、地域住民と子どもに関わる関係機関等が連携して、地域における子どもの健全育成の環境づくりを進めることなどがその役割とされた。

本研究において協働したB 児童館は、京都市伏見区に位置している。2023年4月4日現在の

データでは、京都市内の児童館数は129館であり、京都市は全国有数の児童館数を有している。このうち29館が伏見区に位置する（公益社団法人京都市児童館学童連盟2024）。B児童館は、同じ社会福祉法人が運営する高齢者総合福祉施設¹⁾と合築され、多機能化された施設として知られる。

学童を対象とした遊びのプログラムや文化的活動のほか、地域子育て支援拠点として乳幼児とその保護者を対象とした様々な子育て支援プログラムも企画している。

(2) アウトリーチ活動の概要

音楽ゼミナールと社会福祉ゼミナールが協働し、B児童館で行ったアウトリーチ活動の概要を示す。

①立案から実施までのスケジュール

2023年の8月下旬に筆者らがB児童館を訪問し、職員から地域の親子のニーズや、子ども・子育て支援プログラムの提供²⁾の可能性を聞き取った。その結果、活動の実施は12月が望ましいこと、対象を未就学児とその保護者に絞ること、普段児童館を利用している小学4年生から6年生の高学年の子どもが所属する施設内サークル（以下、Cクラブという）と学生が協働して活動することとなった。

本研究で企画し、研究対象とした子ども・子育て支援プログラムは、主に未就園児およびその保護者を対象としているが、ガイドラインでは、児童館の活動内容について、子育て支援の実施として、保護者の子育て支援、乳幼児支援、乳幼児と中・高校生世代等との触れ合い体験の取組、地域の子育て支援を挙げている。本研究において実施したプログラムはこの子育て支援の実施に資するものである。遊びを通して子どもの情操や創造性、自発性を豊かにすることを目的としており、Cクラブのプログラムへの参画

はこれにかかわる本プログラムの特色のひとつである。

②当日の概要

実施した日時は、2023年12月9日（土）の午前10時から11時30分であり、B児童館の3部屋で実施した。参加者は、乳幼児23名、その保護者21名、Cクラブ13名、学生24名、教員2名、B児童館の職員3名である。音楽ゼミナールが実施する音楽劇は、児童館で最も広い板の間のホールで行った。社会福祉ゼミナールが実施する遊びのブースは、「クリスマスベル」の製作活動を通常図書室として使用されている小スペース1部屋で実施、「ボーリング」と「輪投げ」の活動をカーペット敷きの中スペース1部屋で実施した。合計3部屋で、4つのブースに分かれ活動を実施した。子どもが各活動に参加すると、首から下げたカードにスタンプを押すスタンプラリーも実施した。

③音楽ゼミナールの活動概要

音楽アウトリーチの活動内容の分類について、齊藤（2013）は、小中学校の音楽科の授業で実施された多様なアウトリーチを、3つの階層に分けて分類した図「アウトリーチ活動の分類」を用いて説明している。この分類に倣うと、今回の実践では、対象のうち未就学児が楽しめる活動として、「鑑賞系」・「参加型」・「体験タイプ」になるように留意し、学生が演じる音楽劇にCクラブの子どもが参加できる活動を取り入れたプログラムを立案した。

音楽劇の脚本、衣装、小道具、大道具、参加者とともに行う音楽的な活動は、全て学生が考案し作成した。Cクラブの子どもには、劇の背景になる壁に貼るクリスマスツリーとその飾り付けの作成と、音楽劇への登場を依頼した。表1に劇のタイトル、あらすじ、活動を実施したタイミングを示す。

活動①は、学生が「ジングルベル」（作曲：J. ピアポント）をトーンチャイムで演奏し、子どもと保護者が鑑賞した。活動②は、「ぐるぐるりんりん」（作詞作曲：川島（2013））の音源を流し、学生が人形を子どもに見立てて見本を示し、保護者が子どもを抱き上げ音楽に合わせて身体を動かす遊びを実施した。活動③は、子どもと保護者に幼児用の鈴とマラカスを配布し、学生が「山の音楽家」（作詞：水田詩仙、ドイツ民謡）をピアノで演奏し、歌いながら一緒に演奏した。活動④は、学生がマリмба1台、グロッケンシュピール1台、鍵盤ハーモニカ3台、ピアノ1台、鈴1個、タンブリン1個で「サンタが街にやってくる」（作曲：J.F. クーツ）を合奏し、子どもと保護者が鑑賞した。活動⑤は、学生、子ども、保護者の全員で「あわてんぼうのサンタクロース」（作詞：吉岡治、作曲小林亜星）を歌った。音楽劇の所要時間は30分程度であり、第1部は10時10分に、第2部は10時50分に開始し、同じ劇を2回公演した。第1部を観覧した来場者が、再度第2部を観覧する様子が見られた。

なお、実践した学生は、音楽大学や教育系大学の音楽科に在籍する学生のように、音楽を大学で専門に学んではいない。しかし、音楽を専

門とする筆者が演奏に関する指導を行い、保護者や子どもが「鑑賞」するのにふさわしい演奏技術を担保した。

④社会福祉ゼミナールの活動概要

社会福祉分野のゼミナールでは、児童館が遊びにより子どもたちの自発性や創造性に働きかけ、情操を育むという目的を最初に共有した上で、児童館が有する機能を学習するところからワークショップブースのプログラム設計に入った。プログラム設計にあたっては、①安全性に配慮するとともに、②子どもたちの主体性と発想を大切にプログラムを採り入れること、③未就園児親子を対象としながらも、そのきょうだいや協力者であるCクラブの小学生も含めて、年齢に幅を持たせて楽しむことができるブースを立案することを念頭に置いて準備を進めるよう学生に伝え、企画調整会議を行った。

その結果、次の3つのブースを設計するとともに、音楽劇とワークショップブースを楽しみながら自由に行き来できるようにスタンプラリー形式を採用することとした。

ひとつは「サンタにとどけ！キラキラわなゲーム」（輪投げ）である。輪は、クリスマスの華やかな雰囲気の色により演出するため、透明な

表1 音楽劇の概要

<p>タイトル： 「サンタクロースと愉快な森の音楽隊～音楽の力でクリスマスプレゼントをゲットしよう～」</p> <p>あらすじ： サンタクロースとトナカイが、ある森の子どもたちにクリスマスプレゼントを届けにやってきたが、プレゼントを入れている箱の蓋が開かず困っていた。森の妖精フォレスティナが、音楽の力を示すメーターが減っているため箱が開かないことに気づいた。音楽の力を取り戻すため、森の仲間たち（ウサギ・クマ・イヌ）を誘い、「ジングルベル」を奏でた（活動①）。次に、森の仲間達が来場者に、音楽に合わせて一緒に身体を動かそうと呼びかけた（活動②）。次に、「山の音楽家」を一緒に演奏しようと呼びかけた（活動③）。サンタクロース、トナカイ、森の動物達で「サンタが街にやってくる」を演奏した（活動④）。</p> <p>そこへ、音楽が嫌いなブラックサンタが音楽の力を奪いにやってきた（Aクラブの児童がブラックサンタの手下として登場）。フォレスティナは、皆の歌声でブラックサンタに音楽の楽しさを伝えようと提案し、皆で「あわてんぼうのサンタクロース」を歌った（活動⑤）。最初は不満げなブラックサンタだったが、歌の後半になると一緒に歌い楽しんでいた。歌い終わった頃には、メーターは音楽の力でいっぱいになり、サンタクロースは箱を開け、子どもたちにプレゼントを配ることが出来た（来場者に手づくりのクリスマスツリーを配布）。</p>
--

チューブの中にビーズを詰め、重みと握りやすさを意識して製作した。振ると中でビーズが移動して音が鳴るため、耳でも楽しむことができる工夫がなされた。標的となるボールにはペットボトルを用い、透明な色水を作り、視覚的にきれいさを醸し出すとともにボールの重みとした。難易度を3段階に分けて設定し、全年齢児が楽しむことができる工夫がなされた。

次に、「スノードームボーリング」である。ピンはペットボトルを用い、中はクリスマスを意識してスノードームに見立てた製作した。また、綿を詰めて軽くしたものを含め2種類を用意した。未就園児親子が対象であったため、ボーリングとしての楽しみ方以外にも、ボールに触れることそのものに関心を持ったり、投げる動作に挑戦したりする子どももあり、自分で楽しみをみつけるといった主体性や創造性を刺激する取り組みであったことが伺える。

「つくって、鳴らそう、自分だけのクリスマスベル」は、音が鳴る腕輪の製作である。音楽劇鑑賞の際に参加の要素を演出するためのベルとした。子どもたちが好きなものを選んで製作できるように、多くの種類を準備した。音にこだわり素材を試行錯誤するとともに、パーツを組み合わせ、絵を描いたり、色を塗ったりして、子どもと保護者が1から一緒に作り上げるうれしさを分かち合うことができるよう願って、このブースが企画された。

そして、スタンプラリーで用いるカードは、クリスマスらしいイラストを台紙とし、柔らかい毛糸を長めに使うことで肩かけができるようにした。これにより、冬らしい演出がなされた。

2-2. 質問紙調査の概要

B児童館で実施したアウトリーチ活動に参加した来場者と学生に、それぞれ異なる質問紙調

査を実施した。調査対象者ごとに、調査の時期、調査方法、調査内容を示す。

(1) 来場者対象の質問紙調査

本調査は、2023年12月9日(土)に、B児童館でのアウトリーチ活動に参加した来場者のうち、研究参加の同意を得られた11名の保護者に対し、活動実施直後に質問紙を配布して行った。質問紙の回収率は100%だった。

設問は7項目あり、あらかじめ記述された回答を選択、自由記述による回答である。本稿では、本研究における中核的回答となる設問4、5、6、7を取り扱う。設問4は本日のイベントの感想とその理由で、「大変良かった」、「良かった」、「普通」、「あまり良くなかった」、「良くなかった」の5項目から選択、設問5は本日参加した「遊びのブース」、また、これらのうち、子どもが特に楽しそうにしていたと思う活動とその理由、設問6は本日参加した「音楽のブース」の活動、また、子どもが特に楽しそうにしていたと思う活動とその理由、設問7は今後体験したい遊びや演奏のプログラムを設定した。それぞれ、質問に応じた回答の選択と自由記述の併用とした。

(2) 学生対象の質問紙調査

対象者は、B児童館でのアウトリーチ活動を行い、研究参加の同意を得られた24名の学生である。24名は、筆者らが担当する「保育専門ゼミナール」に所属しており、内訳は音楽ゼミナール12名、社会福祉ゼミナール12名、合計24名である。2023年12月12日(火)の授業時間外に、氏名を収集しない方法で質問紙調査を実施した。なお、質問紙の回収率は100%だった。

質問紙の設問は、社会福祉ゼミナール所属の学生対象に7項目、音楽ゼミナール所属の学生対象に4項目、両ゼミナールの学生対象に3項目である。本稿では、本研究の趣旨に照らして

プログラム全体とアウトリーチにかかわる、両セミナーの学生が回答した3項目を取り扱う。設問1は「活動全体の流れについて良かったこと」、設問2は「活動全体の流れについて改善点」、設問3は「今回のアウトリーチ活動の意義について感じたこと」である。

(3) 倫理的配慮

全ての調査にあたり、筆者らが説明書、質問紙を配布し、口頭及び文書で説明し研究協力の依頼を行った。研究の参加は自由意志によるものであり、参加、不参加の選択により不利益を受けることが無いことを説明した。また、対象学生には、成績評価及び指導において不利益を受けることが無いことを説明した。質問紙の提出を以って、研究実施の承諾を取得した。

2-3. 分析方法

筆者らで、KJ法（川喜田1986）を用いて、学生の回答の分析を行った。各設問の回答から得たラベルをグループ編制し、その結果を叙述化し、活動の教育効果を検討した。

3. 研究結果

質問紙調査の結果は、以下の通りである。

3-1. 来場者の回答結果

設問4のイベントの感想は「大変良かった」が7名、「良かった」が4名だった。自由記述からその理由を分類すると、音楽劇やゲーム、製作など子どもが楽しめるブースが多くあったなど、「活動数が多く楽しめた」が2件、音楽劇が楽しかった、本格的だったなど「音楽劇が良かった」が2件、「子どもを見てもらえて嬉しかった」が1件だった。設問5の参加した遊びのブースでは、スタンプラリー形式で各ブースを回遊する形式を採用したことにより、ほとんどの来場

者が全ての遊びのブースを経験していたため割愛する。設問5で回答した遊びのブースの中で、子どもが楽しそうにしていた活動（複数回答選択可能）は、「クリスマスベル」が5件、「輪投げ」が3件、「ボーリング」、「スタンプラリー」は1件ずつだった。その理由を分類すると、「クリスマスベル」は、「身につけて嬉しそうにしていた」が2件、「自分で作るのが楽しそう」が2件、「輪投げ」は、「輪に関心を持ち振っていた」、「学生が盛り上げてくれた」が各1件だった。また、「クリスマスベル」と「輪投げ」は持ち帰ることができたため、「お土産をもらえて嬉しそう」の回答が1件だった。他には、「子どもが6カ月のためできることは無いが親が楽しんだ」が1件あった。設問6の参加した音楽のブースは、ほとんどの来場者が全ての音楽のブースを経験していたため割愛する。設問6で回答した音楽のブースの中で子どもが楽しそうにしていた活動（複数回答選択可能）は、「山の音楽家（合奏）」が6件、「ジングルベル（トーンチャイムの演奏）」が3件、「あわてんぼうのサンタクロース（歌）」、「サンタが街にやってくる（合奏）」は各1件だった。その理由を分類すると、「山の音楽家（合奏）」は、「楽器を演奏でき楽しい」が4件、「ジングルベル（トーンチャイムの演奏）」は「音色が美しかった」が3件、「サンタが街にやってくる（合奏）」は「ノリノリのリズムが良い」が1件だった。設問7の今後体験したい遊びや演奏のプログラムについては、「皆で身体を動かすプログラム（ダンス、リトミック）」、「楽器を鳴らせるプログラム」、「季節行事」が各1件だった。また、感想として「ボール入れを楽しんでいた」が1件あった。

3-2. 学生の回答結果

学生の回答から得られたラベルをグループ編

成したものが、図1である。各設問の分析結果を以下に示す。

①設問1の分析

設問1 活動全体の流れについて良かったこと
 の回答から、38のラベルを抽出した。それらを用いて2段階のグループ編成を行った結果、最終的に9グループになった(図1-A)。まず、全体図から「活動全体の流れにおける良かったこと」を抜粋し叙述化する。

「当日までの準備段階において、各自が互いに意見を出し積極的に取り組んだことで、立案及び進行がスムーズに行われた。当日は、立案された計画を基に小学生と両ゼミナールが連携したことや各自が役割分担を全うし臨機応変に行

動したことで、スムーズに進行した。学生が工夫した具体的な活動として、参加者に向け自ら発信し声かけを行い、場を盛り上げたこと、子どもが製作した物を持って帰れるようにしたこと、保護者からの要請に応じて急遽子どもと写真撮影会を行ったことが挙げられる。その結果、子ども、保護者、Cクラブ、学生ともに場を楽しむことができ、提供者、対象者ともに楽しみ満足できる活動だった。」

②設問2の分析

設問2「活動全体の流れについて改善点」の回答から、27のラベルを抽出した。それらを用いて2段階のグループ編成を行った結果、最終的に9グループになった(図1-B)。次に、全体図

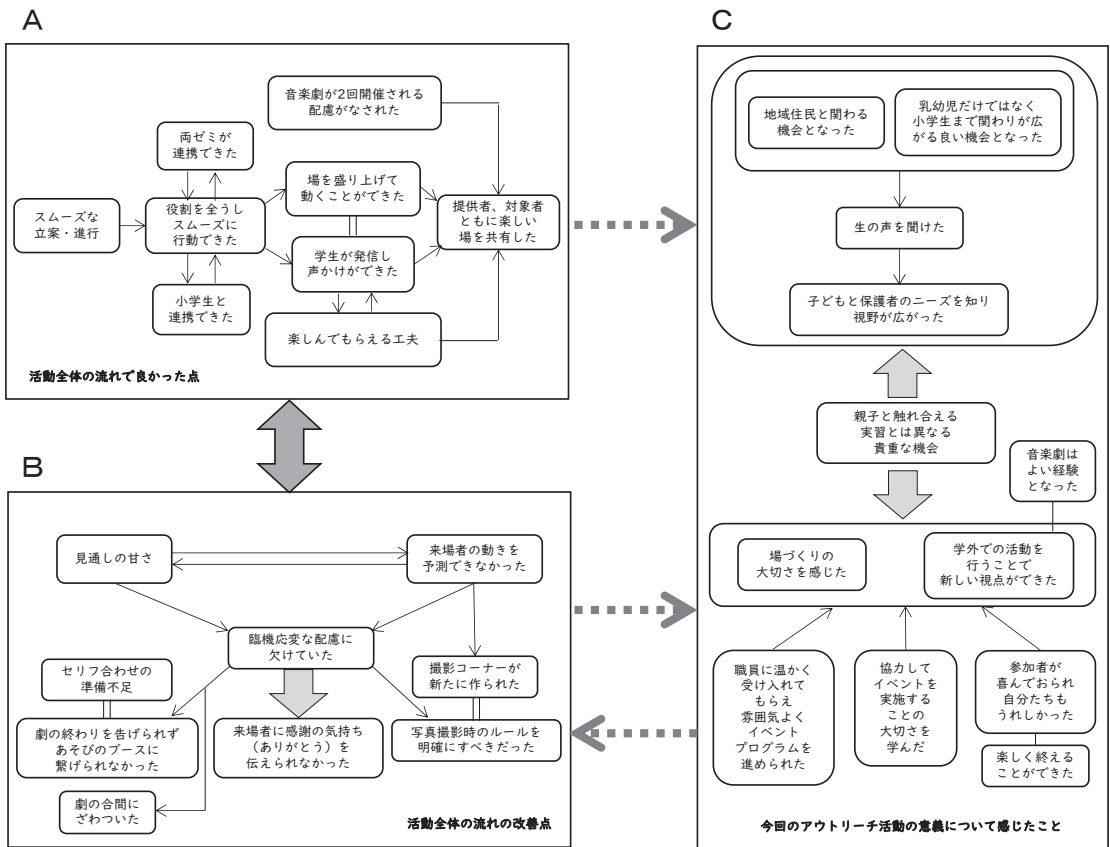


図1 学生の回答結果から得られた全体図

から「活動全体の流れにおける改善点」を抜粋し叙述化する。

「活動における反省点として、準備段階で小学生の役割を考えていなかったブースがあったこと、両ゼミナールでの情報共有ができていない点があったことなど、見通しの甘さを挙げられる。当初の計画では、子どもが遊びのブースでクリスマスベルを作った後に音楽劇に参加し、音楽的な活動でベルを使用する予定だった。しかし、第1部の音楽劇が開演すると、ほとんどの来場者があそびのブースを体験しないまま観劇したため、子どもはベルを持っていなかった。また、劇の開演中は遊びのブースに来場者がいなくなったなど、来場者の動きを予測できなかった。音楽劇の第2部終了後に、保護者から要請があり多くの子どもと記念撮影を行ったが、撮影時のルールが明確ではなかった。また、音楽劇の終了を明確に伝えられなかったことや、劇の合間に出演者がざわついたことに加え、来場者に声かけし案内することができなかったことなど臨機応変な配慮に欠けていた。さらに、来場者に感謝の気持ちはあったものの、言葉として伝えるタイミングを逸してしまった。」

②設問3の分析

設問3「今回のアウトリーチ活動の意義」から、30のラベルを抽出した。それらを用いて2段階のグループ編成を行った結果、最終的に12グループになった(図1-C)。全体図から「今回のアウトリーチ活動の意義」について学生が実感した点を抜粋し叙述化する。

「今回の活動では、乳幼児だけではなく小学生を含む関わりであり、保護者も参加し、地域の住民と関わる良い機会であった。本活動を通して、学生は、子どもや保護者が活動している姿を見て生の声を聞くことができたため、乳幼児親子のニーズを知り視野が広がった。また、親

子とふれ合える充実した貴重な機会と捉えていた。さらに、子ども・子育て支援の場づくりの大切さを感じるとともに、学外での活動により、実習や演習にとどまらず新たな視点を培うことができたと感じている。音楽劇に携わった学生は、初めて音楽劇制作を経験することができよかったと感じている。充実した活動に結びついた要因として、参加者が喜んでる姿を見ることで学生の意欲が高まったこと、児童館の職員の方に温かく受け入れてもらえたことが挙げられる。総括すると、学生は、小学生や施設の職員と協力してイベントプログラムを実施することの大切さを学ぶことができた。」

4. 考察及び今後の課題

4-1. 来場者の回答結果から

来場者が、本プログラムをどのように捉えたかを探る。まず、設問4のイベントに対する感想は、概ね高評価であり、その理由として活動できるブースが多かったことや、音楽劇が楽しめたことが挙げられた。2つの異なるゼミナールが協働し、活動内容が異なる4つのブースやスタンプラリーを提供できたことが評価に繋がったといえる。設問5の子どもが楽しそうにしていた活動から、各ブースで工夫したこと(自分で製作したクリスマスベルを腕に付けられるようにしたこと、輪投げの輪のチューブに彩りを加え興味を引くように作成したこと、製作したものや輪を持ち帰るようにしたことなど)が、評価されたことが分かる。音楽のブースでは、設問6の子どもが楽しそうにしていた活動として、「山の音楽家(合奏)」が最も多かった。鈴とマラカスを配布し、子どもが演奏できるようにしたことが理由として挙げられ、子どもが生き活きと楽器遊びに取り組んだことが分かる。設問7の今後体験したい遊びやプログラムから、「身体

を動かす」、「楽器を鳴らせる」、「ボール入れを楽しむ」など、子どもが動いて参加できるプログラムについて要望があり、今後反映していきたいと考えている。

4-2. 学生の回答結果から

学生が本プログラムをどのように捉えたかを探る。当日までの準備段階について、設問1の回答から、学生は、各自が積極的に取り組み各ブースの立案及び進行段階がスムーズに行われたと回答している。しかし、設問2の回答では、Cクラブの役割について考えが及んでいなかったブースがあったり、両ゼミナールの連携が取れていなかったりしたことが挙げられている。これらのことから、各ブース担当の学生間では、役割分担や情報共有がなされスムーズに進んでいたが、ゼミナール全体や、両ゼミナール間では、情報共有が綿密になされていなかったことが分かる。

当日の来場者への対応について、設問1の回答では、Cクラブと両ゼミナールが連携し、各自の役割を全うしたこと、参加者に向けて声かけを行い、学生が自ら意欲的に行動できたとの回答を得ている。また、保護者からの要望で、急遽学生と子どもたちの写真撮影会が行われ、臨機応変に対応している。しかし、設問2の回答では、来場者への案内の声かけや、音楽劇の終了を伝えられなかったこと、感謝の気持ちはあったものの言葉として伝えることができなかつたことが挙げられている。これらのことから、来場者に臨機応変に対応し、積極的に声かけできた学生と、来場者に配慮すべきことへの気づきはあったものの、適切な行動ができずに悔やんでいる学生がいたことが分かる。

当日の来場者の動きについて、設問2の回答のとおり、第1部の音楽劇が開演すると、来場

者は遊びのブースを体験しないまま、観劇した。そのため、立案時に計画していた、子ども自身が製作したクリスマスベルで音楽劇の「山の音楽家」を演奏することができなかった。また、音楽劇の開演時は来場者が音楽劇の会場に集合してしまうため、音楽劇と遊びのブースに来場者を振り分ける仕組みが必要ことが分かった。

児童館における子育て初期にある未就園児親子への支援には、乳幼児支援と保護者支援の二つの側面があり、児童館に行けば、楽しい試みに出会えたり、困りごとに直面した際の支援を受けることができたりするなどの期待感が、児童館への来館の動機や安心感につながるということが指摘されている（厚生労働省2018、小学館集英社プロダクション2022）。

直接的な支援ではなくても、学生という人的資源が媒介者となって、間接的に子ども・子育て支援プログラムを提供することにより、日常の児童館プログラムとは趣が異なる企画を提供することができる。児童館のような地域資源の継続的な利用を促進するためには、来館への動機づけのために必要な多様なプログラムの提供が求められる。こうした取り組みを通して得た関係が、児童館への信頼と安心感を醸成することにつながる。

児童館で提供されるプログラムは、そうした意図をも包含しており、その点において、福祉的観点をも有するゼミナールと音楽ゼミナールが協働することで得られる、児童館における新たな子ども・子育て支援プログラム設計の可能性を見出すことができる。

来場者と学生双方の回答結果からは、来場者にとって、安心できる環境の中でこのプログラムが実施されたことが分かる。これは、児童館という場の特性を熟知し対象者と信頼関係を形成してきた児童館側の、学生が考案したプログ

ラムの受け入れ態勢に負うところが大きかったであろう。また、学生側からの視点では、活動全体において良かったと評価した点はすなわちアウトリーチ活動の意義の発見に通じ、アウトリーチ活動の意義を考察する中で、見出された改善すべき点は、次の学年へと引き継がれることに貢献する。

特に本研究におけるプログラムは、その大半が保育士資格および幼稚園教諭2種免許状に係る実習をすべて終えた保育者養成校の短期大学2年次生により実施され、乳幼児期にある子どもへの関わりを経験してきた学生によるものである。一方で、学生の側からは、在園・入所する子どもとの関わりが中心となる実習とは異なり、不特定の子どもの社会的養護における施設での実習以外では関わる事がなかった年代の子どもとの関わり、保護者との対話、予測できない環境への柔軟な対応が求められた。この点において、双方にとって有益な取り組みであったと同時に、学生は新たな角度から保育を捉え直している。

保育者養成校には地域資源のひとつとして、専門性を有する教員と、子どもとの関係づくりに意識を高め、そのために必要な知識と実践を蓄えてきた学生という、人的資源が存在している。この点で、こうした取り組みを学内資源にとどまらず、広く地域資源をフィールドとして、児童館等で日常から展開される子ども・子育て支援プログラムに関わり続けることの意義がある。そのためにも今後、保育者養成課程の各科目において、アウトリーチが必要とされる背景や社会的ニーズを教授する仕掛けが必要になるであろう。

謝辞

本研究にご協力いただいたA短期大学の学生、B児童館の職員の方々、Cクラブの方々、アウトリーチプログラムにご参加いただいた来場者の皆様に心より御礼申し上げます。

本論の活動は令和2年度京都文教短期大学特別研究費助成を受け実施したものである。

注

- 1) 特別養護法人老人ホーム、ショートステイ、デイサービス、ケアプランセンター、ホームヘルプステーション、地域包括支援センターを運営している。
- 2) A短期大学幼児教育学科では、教員や学生が、専門性を生かして取り組む、地域連携により行う実践プログラムの総称を「ぶんきょう子どもひろば」と呼んでいる。本稿で取り組んだ子ども・子育て支援プログラムは、その一貫として実施した。

引用・参考文献

- 荒井和樹 (2019)『支援を前提としない新しい子ども家庭福祉 子ども・若者が創るアウトリーチ』アイエス・エヌ株式会社。
- 新井恵美・木下大輔 (2013)「教員養成課程カリキュラムに取り入れた音楽アウトリーチ活動—宇都宮大学教育学部音楽教育専攻の実践例—」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』36号、17-24。
- 福井真裕子・山成昭世 (2012)「ワークショップ型教育の研究Ⅱ—実践プログラム『“みんな”で創るものごと』における表現活動の報告』『聖母女学院短期大学紀要』第41集、63-74。
- 福富昌城 (2011)「ソーシャルワークにおけるアウトリーチの展開」『ソーシャルワーク研究』、37 (1)、34-39。
- 福富昌城 (2021)「ソーシャルワークの過程 ケースの発見とエンゲージメント (インテーク)」一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟編『最新 社会福祉士養成講座・精神保健福祉士養成講座 12 ソーシャルワークの理論と方法 [共通科目]』中央法規出版、42-56。
- 原尚志・山中和佳子・木村次宏 (2016)「音楽アウトリーチ活動の実際と展望—福岡県宗像地区での実践を通して—」『福岡教育大学紀要教育実践研究編』第65号、第6分冊、1-8。
- 林睦 (2013)「音楽教育におけるアウトリーチを考える—基本的な考え方、歴史的経緯、最近の動向」『音楽教育実践ジャーナル』10 (2)、6-13。

- 狭間香代子 (2023) 「アウトリーチ」山縣文治・柏女霊峰編集委員代表『社会福祉用語辞典 [第9版]』ミネルヴァ書房、3.
- 川喜田二郎 (1986) 『KJ 法－混沌をして語らしめる』中央公論社.
- 川島智世 (2013) 「生後すぐからできる赤ちゃんのリズム体操」学研プラス、42-45.
- 公益社団法人京都市児童館学童連盟 (2024) 「京都市児童館一覧」 (<http://www.kyo-yancha.ne.jp/jidokan/ichiran.html> 2024年10月13日最終閲覧).
- 厚生労働省 (2018) 「児童館ガイドラインの改正について (通知)」 (https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/8f03ee44-b4a9-4206-a613-e0ecf72b380c/85afc74f/20230401_policies_kosodateshien_jidoukan_03.pdf 2024年10月1日最終閲覧).
- 牧里毎治 (2023) 「包括的支援体制とコミュニティソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』、1 (1)、5-17.
- 松宮透高 (2021) 「アウトリーチ」中坪史典・山下文一・松井剛太・伊藤嘉余子・立花直樹編集委員『保育・幼児教育・子ども家庭福祉辞典』ミネルヴァ書房、586.
- 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング (2021) 「重層的支援体制整備事業に関わるようになった人に向けたガイドブック (令和3年3月)」 (https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2022/11/houkatsu_09_1-1.pdf 2024年10月1日最終閲覧).
- 宮澤多英子 (2024) 「保育者・教員養成における音楽アウトリーチの教育的意義と課題」『川口短期大学紀要』37、169-183.
- 永島茜 (2021) 「音楽アウトリーチ研究の現在－活動が抱える課題の分析と今後の方策－」『武庫川女子大学学校教育センター紀要』6、95-108.
- 大塚真理子・木戸宜子・鶴岡浩樹 (2023) 『地域共生社会をつくる 多職種連携・協働のあり方とは』ワールドプランニング.
- 齊藤豊 (2013) 「音楽の授業におけるアウトリーチ活動の展開－アウトリーチ活動の目的と形態からみた分類の試み」『音楽実践ジャーナル』10 (2)、77.
- 社会福祉法人健光園ホームページ (2024) (https://www.kenkouen.jp/shisetsu/momoyama_jidokan/ 2024年10月1日最終閲覧).
- 小学館集英社プロダクション (2022) 「厚生労働省委託事業 児童館における福祉的課題を抱える子育て家庭への支援に関する調査研究」 (<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000934256.pdf> 2024年10月1日最終閲覧).
- 高橋千絵 (2013) 「音楽アウトリーチにおける学生の学びに関する一考察－広島文化学園大学学芸学部音楽学科の事例から－」『子ども・子育て支援研究センター年報』第3号、41-54.
- 田邊裕子 (2024) 「学生が主体となった親子参加型音楽活動の実践－子育て支援と音楽アウトリーチの視点からみた学びの分析－」『山梨学院短期大学研究紀要』第44巻、65-74.
- 渡邊慶一・山成昭世・福井真裕子 (2011) 「協働する実践－児童館プログラムから福祉と表現による参加型手法の可能性を探る－」『聖母女学院短期大学紀要』第40集、40-57.
- 渡邊慶一 (2012) 「ワークショップ型教育の研究 I－実践プログラム『“みんな”で創るものがたり』の発想－」『聖母女学院短期大学紀要』第41集、50-62.